# 眺望 PROSPECTS

熊本県立大学
学長　堤　裕昭

## 干潟と共に暮らす日々

熊本県には約12,000haの干潟が現存し、その面積は都道府県別では最大で、全国の約22%を占めている。我々が日頃当たり前のように見ている潮の引いた時に現れる広大な干潟の風景は、有明海や八代海を望む地域を除けば、きわめて例外的なものである。この干潟やそこに接続する河川の河口域は、熊本における悠久の歴史の中で我々の豊かな食材に恵まれた暮らしを支えてきた。縄文時代や弥生時代の貝塚からは、このような場所に生息していたであろう二枚貝類（カキ、アサリ、ハマグリ、アゲマキガイ、ハイガイ、ヤマトシジミなど）が多数出土している。当時の人々は、これらの貝類を食し、食料としての貴重な蛋白源に利用していたと思われる。貝類は逃げ去ることがほとんどなく採集が容易で、当時の人々が取り尽くせないほどの量が干潟に生息し、持ち帰っても１日や２日は殻を閉じたまま生きている。また、どれも美味なる食材であり、単に栄養として必要な物を取ることに収まらず、食することを存分に楽しんでいたことは想像に難くない。

それから数千年から１万年ほどの時が過ぎ、21世紀となった現在の熊本県の有明海や八代海の海岸を振りかえると、古代の人々が貝を採集した干潟は今なお残っている。しかしながら、これらの二枚貝類はこのわずか50年間で激減した。かつては湧いて出てくるように取れて、大勢の人々が漁に汗を流し、潮干狩りに歓声を上げたアサリでさえ、口にする機会が限られるようになった。ところが、残された貝類の価値は他の地域では干潟そのものが大幅に減少したことで、むしろ貴重な国産の食資源として高まっている。交通・流通手段の発達した現代社会においては、地元で食べる食材としての価値にとどまらず、莫大な経済的な利益を熊本の地にもたらすはずのものである。

以降は会員専用ページにて公開しております。
ご覧頂くには、入会手続き後、会員専用ページより
アクセスをお願いします。
ご入会はこちらから
（入力は数分で終わります）
会員の方はこちらから